

---

# とある普通の能力少年。

空丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある普通の能力少年。

### 【NZコード】

N3176BA

### 【作者名】

空丸

### 【あらすじ】

とある魔術の禁書目録 × 空丸妄想禁書

原作との変更点。

- 1、上条当麻の能力。
- 2、上条当麻の過去。
- 3、1と2の影響によりずれる物語。

現在【風紀委員編】を更進中。上条×黒子が織り成す物語ご覧あれ。

## プロローグ～猛暑～（前書き）

禁書の一次小説です。

以下無理な人は見ないほうがよかれ。

- ・書き殴り無理な方
- ・禁書愛しまくつて原作以外は許せん方

以下好きな方は見て。

- ・主人公がチート
- ・神裂さん好き
- ・矛盾あっても面白ければOK

# プロローグ～猛暑～

とある魔術の禁書目録

×

空丸 妄想

「とある普通の能力少年」

→ LOST THE IMAGINE BREAKER ←

♪プロローグ♪

季節は夏。

能力開発を目的として科学の粋を集めた『学園都市』にも、逃れようのない熱気が訪れていた。

「はあ・・・・、熱い・・・」

第七学区の学生寮ももちろん例外ではない。安い賃貸マンションであるため、資材に断熱効果を施している可能性は極めて低く、エアコンを使用しない限り部屋は蒸し風呂状態になる。

「・・・・み、水・・・・」

まるでウニみたいな頭髪だな。と、クラスメイトから馬鹿にされるシンシン頭もなだれ、上条当麻は氣だるい表情で冷蔵庫を開けた。

そこには先週買ひこんだ食材があるだけで、ドリンクと呼ぶにふさわしい水分は存在しない。

「ふ、不幸だ・・・」

コップを取り出し、水道水を入れるも熱湯が出続けるだけで目的を果たせない。

「くつ、仕方ない。布団でも干してジュース買いに行くか」

毎日布団を干しなさい。それが、彼の母親の唯一の言いつけであり、彼の守る唯一の決めごとだ。

敷布団とタオルケットを抱えると、右足でガラス戸を開ける。少年に防犯の意識はなく、ガラス戸に鍵はかけていない。

「ふーーー、エアコンつけてないと外のほうが涼しいかも・・・な

ベランダに出ると、そこには白い布がかけてあつた。

純白の布は日差しを浴びて輝いており、それが高級な品であると布の知識が皆無である彼でもすぐに理解できた。

「え、えーっと、・・・上の階から落ちてきたの・・・か・・・な  
つ！？」

拾い上げようと手を伸ばした瞬間、それは生物のようにもぐもぐと動いた。

否、生き物だった。中身の話だが。

その“生き物”的先端が折れ曲がり、エメラルドに光る虚ろな瞳がこちらを曖昧に捉えた。

折れ曲がった反動で銀髪が水のように流れ、ベランダの床まで届く。透き通るような白い肌をしており、それが人間とても美しい少女だと認識するのに、上条は多くの時間を必要としなかつた。

「……あのー、ビビちゃん様でしょ?」

日本語は通じるのか、滑り落ちないのか、なぜここにいるのか、さまざまな疑問と質問が生じる中で、上条は日本人として恥じない規範的行動“身分の確認”を試みた。

しかし、少年の思考はあっさりと瓦解する。

「……」飯を食べさせてくれるとうれしいな

「日本語で……しかも話を聞いてくれていない

がつくりとうなだれつゝも、上条は少女を抱き上げた。

想いと願いが交差する時、『物語』は始まる。

## 第一章『歩く協会』

### 第一章『歩く教会』

「ふもつ ふもつ」

「・・・・・」

「ふもつ ふもつ ふもつ」

脱水症状を起こしかけていたことをすっかり忘れ、ウニ頭の少年“上条当麻”は銀髪少女を机越しに見つめていた。

少女はとても幼く見えたが、外人と接することができない。自分より年下なのだろうと決めつけ話を切り出す。もちろん初対面の相手には敬語だ。

「・・・で、あなたはどうしてベランダなんかに引っかかっていたのでしょうか?」

「ふもふもふもふもつ」

よほど腹が減っていたのだろう。頬いっぱいに野菜炒めを詰め込んだまま少女は何かを喋っている。

「まあ・・・後でもいいか

結局、何度もおかわりを催促され、料理を作り足すこと10品目。買いこんでいた一週間分の食料を全て消費した時には、少女は満面の笑みで感謝の言葉を述べた。

「見ず知らずの私なんかのために料理を作ってくれて本当にありがとうなんだよ。この国は他人に冷たいと多くの記録が述べてるけど、そんなことはなかつたんだよ」

えへつ。と破壊力抜群な笑顔を見せられ、いや魅せられた上条は再び先ほどの話を切り出す。

「え、えーっと、君が誰なのか、そしてなぜうちのブランダに引っかかっていたのか、できれば馬鹿な上条さんに」教授願いたいんですけど」

少女は表情を曇らせ、そして少し辛そうに答えた。

「それはね、・・・逃げてたんだよ」

逃げていた。とても現実味のない言葉。

「鬼ごっこなんかしてたのか?」

遊びのイメージから急に年下感が強まり、上条はため口になる。しかし、少女は首を横に振ると、

「ううん、違うんだよ。本当の意味で追われてたんだよ」

本当の意味で。少女は続ける。

「私が何に追われて、何から逃げて来たのか。それは聞かないほうがいいんだよ。それより、『飯のお礼がしたいんだよ。なんでも言ってほしいかも』

後半のまくし立てるような言葉は、前半の深追いを拒絶していた。上条もそれを理解して、質問を変える。

「あ、ああ、お礼なんて良いんだよ。それより、名前を教えてくれないか?」

「お安い」用なんだよ。少女に笑顔が戻る。

「私の名前はインデックス。イギリス清教所属のシスターなんだよ」

上条当麻は後悔した。外国少女の笑顔の素晴らしさを知らなかつたことに、日本人に生まれたことに、そして何より先ほど見せた少女の闇を取り除こうともせず諦めたことに。

「インデックス? つて本の目次?」

にわかには信じられない名前だったが、外人の名前の知識などなく、それが冗談なのか本気なのか上条には判断できない。

「禁書目録つて言つて……つて、そんなことはどうでも良いよね」

言葉を濁す。上条はもどかしさを押し殺し、違う質問をした。

「インデックスはシスターとはいえ暑くないのか?」

素材は分からぬが、手が隠れるほど長い袖に、地面をするほどの長さをもつた修道服。見ている側が暑くなるような服装だ。

「ふふーん、これはね“歩く教会”って言つて魔術によつて結界が施されてるから暑くも寒くもないんだよ」

胸を張るインデックスに上条は苦笑いで答えた。

「あー、駄目だそういうの。ベランダにいたから尋常な理由じゃないことは分かるけど、魔術とか歩く教会とか、科学の世界で生きてる俺にはとてもついていけません」

両手を挙げ降参のポーズをとる。

「むむむつ、ヒーまたは理解できてない“あるのだからあるのだろう”科学は信じて、見たことないからつて“あるかもしぬないある”魔術は信じないんだねつ」

さりげなく馬鹿にされていることに上条は気付かない。もちろんインデックス本人も自覚していない。

「んー、だつて科学の恩恵は受けてるけど、魔術の存在を実際に見たことないし・・・まあ、俺の能力も幻想を現実化するつて意味では魔術みたいだけだ」

「・・・何それ？ 魔術名も儀式もなしにそんなことができるの？」

きょとん、と田を丸くして質問するインデックス。

「ああ、科学の力だからな。脳が演算してるからそれが儀式に近いのかもしぬないけど」

「へえ、にわかには信じられない話なんだよ」

お互いに相容れない幻想を抱えていることを理解し、幻想 자체を共有することはあつわつと諦める。

「さて、と。そろそろ行かなきや・・・なんだよ」

インデックスは改めてお礼を述べると、そそくせと玄関へ向かう。

「お、おいインデックス。本当に一人で行っちゃうのか？ 追われてるんだろ？ ・・・何だつ」

上条の言葉を遮り、泣きそうな表情でインデックスは答える。

「とーまは・・・地獄の底まで一緒に飛び込んでくれる・・・かな？」

少女の絶望の端に触れた気がして、少年は歩みを止める。そして、それが答えだとばかりに少女は笑顔で、

「それじゃあ・・・なんだよ」

少女は駆け足で去つた。

「・・・なんだよ、それ」

少年には汚れた食器と、少女の甘い香りだけが残つた。

じたつの上にインテッククス

禁「とーまとーま、ねえとーま？」

上「ん？ なんだインテッククスティ」

禁「ムジ、とうまむじの世から独立させてほしいのかな？」

上「い、いえいえ、それでなんでしょう？」

禁「とうまつて原作じゃ幻想殺しつて能力もつてるんだよね？」

上「ああ、そうだぞ。どんな異能の力でもぶち殺す優れ物だつ

禁「その能力で私の服をひんむくんだよね？」

上「・・・・・」

禁「その上でまだ幼くて可愛い私の裸体を鑑賞して興奮するんだよね？」

上「・・・・・」

禁「とうまは本当は知つてて私の服を破いて襲いかかつとしてたんだよね？」

上「幻想体現！」インデックスの記憶を消去！！」

禁  
止  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
えつと何の話だつけ?

止)・・・ふう、歩く協会越しでも効いて良かつた)

禁一思ひだしたんだよ！ どうおか原作で短髪とトーテンした話なんだよ！……」「

上ふ不幸だあああああ！！！」

あとがき  
完?

空丸「・・・あとがきでもなんでもなくね?」

空蝉「そうですね。でも、これからもやつてくんですよね？」

空丸一 ああうん。こんな湧いて出たような小説を見てくれてる人もいたしな」

空蝉「三人だけですけどね」

空丸「十分です」(。・。)」

これからもよろしくお願ひします

## 第一章『電撃×幻想』その一（前書き）

読みやすさ追求のために、章を切り離せさせていただきます

「意見」「感想あればどんどん来てください（＊＊＊＊）

## 第一章『電撃×幻想』その1

ベランダから始まつた異国の少女との交流が記憶に変わる毎過ぎ、ウニ頭の少年は学生服に身を包みとぼとぼと公園を歩いていた。

「……はあ、不幸だ」

スマートフォンの画面を見ると、そこには担任からのメールが出ていた。

『上条ちゃんは馬鹿だから補習でーす』

「生徒にメールする担任なんてあんたくらいだよ」

それは多くの人間の憧れでもあるのだが、当人が気づくことはない。

しかしながら、本来レベル4である上条当麻が、いくら筆記テストの結果が悪くても補習になることはない。

彼の通う学校にはレベル3以上は数人しかおらず、本来特待生として扱われてもおかしくないのだ。

レベル4【幻想体現】イマジンブレイク

幻想を幻想という枠組みから外し、現実に持ち出す能力。

身体に関わる現象のみに限られるので学園都市に7人しかいないレベル5にはなれないものの、小萌曰く『上条ちゃんはパーソナルリアリティさえしつかり持てば、どのレベル5よりも強くなれるんですよー』

「上条さんは別にレベル5なんかには興味ありませんよーっと」

能力開発のために存在する学園都市において、能力の優劣は必然。その中で一番強く、便利で、貴重な能力者になりたいと願うのはごく当たり前のことだ。

しかし、上条にはいくばくの興味もない。

そのせいで今学期の能力テストは特に成長が見られなかつた。そして結果を見た担任が成績の低い特別補習に上条も組み込んだのだ。

「…………ん？」

第七学区の公園は無駄に広い。

多くの生徒が利用しているのだが、上条の視界におおよそ公園でやることではない光景が飛び込んできた。

「なあ姉ちゃん。ちょっと面かせよ」

少女一人、男数名。

「・・・嫌よ」

少女を囲む男たちは大学生くらいで、その風貌からおそらくスクリアウト（無能力者）か能力を持った不良だと上条は判断した。

「常盤台のお嬢様がこんな所に一人でいるなんて、よっぽど暇なんだろう？」

下心のかカツアゲ目的なのか分からぬが、少女が絡まれているという状況だけは上条にも理解できた。

その時には一歩、踏み出していた。

「なあ、もし来てく『いやあ、ちよつと』めんなさいね」

男たちの会話を遮り、少年は少女の前に立つ。

「なんだてめえ！？」

男の一人が睨めつける。

「いやあ、こいつの連れなんですよ。さつ、行こぜ」

上条は少女の腕を掴み、この場から離れようとする。

「何すんのよ」

少女は勇ましくも上条の腕を振り払い見事な立ちを見せた。

その時、いたずらな風が公園を吹き抜ける。

少女のスカートの中はベージュの短パンだった。

## 二たつの上にインデックス【その2】

禁\_ と\_ ら\_ ま\_ と\_ ら\_ ま\_ 一\_ 一\_ 回\_ ま\_ な\_ ん\_ だ\_ よ\_ 「

上 ああ こんな嬉しいことはないな

上ノンジなんが見てねー！！ 短ノンた短ノン！ ヘー三の短パン！」

禁  
一  
・  
・  
・  
・  
や  
は  
見  
た  
ん  
だ  
ね  
ス  
ガ  
リ  
ト  
の  
中

上  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
見ました」シニシニ

禁本には絶りんが良かうなどと思つてゐる。」

# ମାତ୍ରାବିନ୍ଦୁ

禁  
「  
・  
・  
・  
・  
が  
あ  
！  
！」  
ガブリ

上だあ！ 不幸だああああああ！」

完  
?

ミサカ「・・・縞パンなら私達がいくらでも見せ付けてあげるのに、なんならはきたてほかほかをプレゼントするのに、とミサカはストーカーのようにベランダから一人を覗いてます」

空丸「だあ！ きみはまだ出てないから！」

ミサカ「・・・それは献体番号何番のミサカのことを指しているのでしょうか、とミサカは自己アイデンティティを主張します」

空丸「・・・俺の前にはお前しか映つてないよ」キラリン

ミサカ「・・・へつ、とミサカは既婚者に対して軽蔑の視線をぶつけます」

空丸「・・・ふ、不幸だあ」

## 第一章『電撃×幻想』その2（前書き）

### 前回のおわり（ティックス）

上「とてつもなく不幸だけど、前向きに生きている健気な高校生上条当麻は、教師からの不条理な圧力に負けて、補習の参加を余儀なくされる。登校の途中、公園で少女が一人不良に絡まれていた！！トラブルごとを黙つて見過ごせない人情厚い上条さんが一步踏み出す！！ 少女は無事なのか！？ 上条当麻の安否は！？ とある魔術の禁書目録異聞録』とある普通の能力少年』 お前らの幻想をぶつ殺す！！」

禁「どうまが短髪のスカート覗いて（；）（）ハアハアした後のお話なんだよ」ブンブン

上「ふ、不幸だあああああ！」

## 第一章『電撃×幻想』その2

「お、お前なあ！！ 僕の鮮やかで華麗な作戦を不意にする気が！？」

「誰が頼んだつ！！ アンタなんかの世話になんないわよつ！」

「お、おいつ！ 僕らをシカトすんじゃねえよーーー！」

男の一人が上条の肩を掴む。上条はそれを思い切り振り払うと、口を開いた。

「お前らわかつてんのか！？ 大勢でこんなガキ相手にして！」

「・・・ガキ？」

「見てみろよつ！ このふてぶてしい顔、態度！ 可愛らしさの欠片もねえじやねえか！」

「・・・かけらも？」

「俺だつたら少なくとも、もつと美人でスタイル良いお姉さんを狙うぞ！ だが、お前らみたいに數に頼つた卑怯な真似はしない！ 一対一でせいせいど！」

上条は言葉を止めた。感じたことのない殺氣がそこにあつたからだ。

「言いたいこと言つてくれるじゃないレベル4上條当麻。私の中の電気があんたを焼きぬかせつて溢れだしてきたわ」

そう、上条当麻は少女を本心から助けに来た訳ではない。少女を助けるという形が一番誰にも被害を及ぼすことがなかつたのだ。

しかし、それはもはや手遅れで、

少女 常盤台のエースにしてレベル5、通称【超電磁砲】（レールガン）こと御坂美琴は学園都市きつての電撃使いだ。そして放たれた電撃の総量は人を感電死させるには十分であり、

少女の近くにいた男たちの身は危険極まりなかつた。上条は舌打ちすると、右手の拳を強く握り込んだ。

そして彼は、電撃よりも早く動く自分を“幻想”した。思ったよりそれは簡単で、それを現実に持ち出した時、男たちはすでに御坂美琴の電撃範囲外で茫然と立ち尽くしていた。

「相変わらず無茶苦茶だな。ビリビリ」

上条はウニ頭をかきながら呆れ顔で美琴を見た。

「あんま無茶してやんなよ。こいつらもお前がレベル5だなんて知つてたら絡もうなんて思わなかつただろうし」

それにお前も可愛い女の子なんだから。上条は心中で述べる。

それを言わなければただの説教だとも分からず！」。

「・・・相変わらず強者のセリフよね」

少女の肩に届くかどつかのショートヘアが電気で逆立つ。

「お、おこひ、俺はお前に絡む氣なんてないぞー。ビロビロー。」

少女はふふふつ、と笑つと、全身に力を込めて全力で電撃を放つた。

「ビロビロ言つなー—————。」

無作為に放たれたように見えた電撃は一つの塊となつて上条に向かつた。

(くへ、電撃を受け止める自分を想像しりつー)

上条の能力では物質を変化させることはできない。電気の流れを変えることも、避雷針を立てることもできない。あくまで“電撃に耐えることができる自分”を幻想し、それを現実に持ち出すのだ。

落雷したような大きな音が公園に響いた。

「つー、本気で撃つなよ、ビロビロ。誰かに当たつたらどうするんだ？」

まるで自分は当たつても大丈夫かのような言い草に美琴は苛立ちをつのひせん。

「ほんとあなたつてむかつくわっ……」

連続で電撃を放つ美琴。三つの閃光は的確に上条を捉えている。

が、それが実際に上条に当たる」とはない。“雷より素早く動ける自分”を現実に持ち出した時、彼はすでに公園から立ち去つていたのだから。

「・・・何よそれ・・・何よそれ……」

美琴の叫びも想いもまた、彼には届かない。

## 第一章『電撃×幻想』その2（後書き）

こたつの上にインデックス【その3】

上「こんなばんばん更新して作者は大丈夫か？」

禁「大丈夫なんだよ！ 作者は執筆スピード“だけ”が得意なんだよ！」

上「・・・おそらく泣いてるだろ?」

禁「ところで、今回の話つてアニメの展開に似てるよね？ とつまが短髪の雷打ち消すところとか」

上「あー、原作では打ち消してるけど、この上条さんはただ我慢してるだけで、電撃もろに食らってるぞ」

禁「ええ!? だ、大丈夫なのとつまー?」ナデナデ

上「あ、ああ、ご都合主義の作者だから大丈夫なんじゃね？ 物理的にいつたら死んでるよ確実に」

禁「いや、でもそつとは言い切れないんだよ。落雷を浴びて死ななかつた人つてけつこういるんだよ」

上「え？ そうなのか？」

禁「それでも、あんなすぐに動けるなんて不可能だろ?から、やっぱり作者つて“アホ”なんだね」二二二二

上「…………」

完?

とある屋台の愚痴空間

空丸「…………グスン」

姫神「おー、よしよし、バカなりに面白い展開考えたんだよね」ナ  
デナデ

空丸「だつて、異能力とはいえ、能力者の手から離れたらそれはた  
だの現象だろ?それを打ち消せるなら幻想体現で耐えるくらいでき  
てもいいじゃないか」ビエエエン

姫神「まあ、私が出ていない限り、どうでもいいんだだけね」ニコニ

空丸「…………じ、実は」

姫神「…………何かな? マジカルステッキの出番かな?」チヤキ

空丸「つて、それスタンガンだから……怖いから!」ビクビク

姫神「早く言わないとマジカルステッキが誤作動しちゃうかも」ブ  
イーン

空丸「なんかバブみたいな動きしてたからー！……………実は、このインデックス編が終わったら……」

姫神「私がヒロインの話が始まるんだよね？」

空丸「構想は一種類あつて……」

姫神「ひとつが私を上条当麻が助ける王道ルート。もうひとつが私が当麻を助ける逆ルートだよね？…………きや、当麻って言っちゃつた」テレテレ

空丸「ひとつが一方通行とガチバトル編で、もうひとつが上条当麻がジャッジメントをしていた過去の話（オリジナル展開）なんだけど…………ぎやああああああああああああああ！」

姫神「あ、ステッキが勝手に……ま、いつか」スタスタスタ

空丸「ふ、不幸だあ…………ガク」

## 第三章『特別補習（戦闘ショミーショム）』その1（前書き）

前回のおわりインデックス

ビリビリ「ビリビリつぱりつびりびりつびりびりりピッピカ」

美琴「だあああ… なんなのよ！ この魔訶不思議な生き物は…？」

上条「… よく分からんがこのポーモンの代表的生物みたいなのは俺の幻想が生み出した御坂美琴のイメージらしい」

美琴「… あんたのあたしに対する気持ちがよーく分かったわ」

ビリビリ「ほ、ほらつーまたビリビリしてんー」

ビリビリ「ピッピガチュウ？」

美琴「一匹まとめてぶつとびなさい…」ドガーン

上条「だあああ… 不幸だあああ…」

禁書「みたいな展開だつたんだよ」

## 第三章『特別補習（戦闘ショミレーション）』その1

「…………あえ？」

・・・氣付くべきだつたんだ。

上条当麻は後悔する。補習の指定場所が体育館だつたことに。

上条当麻は嘲笑する。体操着を律儀に用意していたくせに普通の補習を想像していた自分に。

上条当麻は 茫然と立ち尽くす。

田の前で殺氣をまき散らせる体操着姿の男達を見て。

「上条ちゃん、今日は特別補習の戦闘ショミレーションです 」

同じく体操着姿の小萌先生の姿がそこにあつた。小学生と言つても100人が100人とも信じるであろう姿に男達の中の数人はそちらに熱意を向けている。

「上条ちゃん、モテナイ男軍団です いえ、いじんじんぱふぱふ」

「うおおおおおおーー」と、悲しみの雄叫びをあげる男達。ステージ上には女子生徒が男達を見て呆れている。

「上条ちゃんはそのヘタレ根性と向上心のなさを加味しても、うちの学校のHースであることは間違いありません。だからこいつして無理やり能力の向上を図りますです」

「そんなことあつませんので今すぐ帰らせてください」「無理です」

小萌先生が自分を特に気にかけていてくれていて、それがレベル4だからという理由でなく、『上条当麻』という人間を心配してくれていることは彼自身すぐ感謝している。

しかし、こと自分のために戦つことが苦手な上条ことって、この状況はすぐ燃費の悪い展開だった。

「じつせん上条ちゃんのことですか、『はあ、めんどくさい』。帰つてH日本でも読みたい。委員長ちゃんのおっぱい想像しながらハアハアしたい・・・』とか思つてるのでしおうがそうは間屋がおろしません」

「いや、吹寄制の胸は確かに超絶魅力的な豊満おっぱいだが、あいにく上条さんはクラスメイトを想像しながらハアハアする趣味はござりません」とよ

「・・・上条当麻。貴様とこつやつは」

ステージ上から強い殺氣が上条を突き刺す。

「…………は、ははっ、委員長様おられたのですか？」「

吹寄は無表情のまま上条を見下していた。それはクラスメイト（自分も含む）にとって「」優美であり、至極恐悦だった。

「吹寄ちゃんを含む、こここの女子生徒たちは上条ちゃんファンクラブなのですよ～」

「…………え？」「は？」

上条と吹寄の声がかぶる。

「冗談です　でも、多くの生徒は上条ちゃんの能力を見たくて集まってくれたのですよ　」

学園都市では珍しくないレベル4も、この学校に限定してしまえば、上条ただ一人しかいない。興味レベルから真剣に勉強したくて集まつた生徒達なのだろう。上条はため息交じりに口を開いた。

「…………たぐつ、分かりましたよ。この上条さん、悩める未来の希望達のために一肌脱ぎましょ～」

腰を落とし、軽く屈伸運動をする。上条の能力は状況によつては身体に負荷をかける場合がある（ほほその場合なのだが）。だから、準備運動は念入りにおこなつ。

「あ、上条ちゃん、言い忘れてましたけど、上条ちゃんが負けるとステージ上のか弱い女の子達はその荒れ狂う男達の毒牙にかかりてしましますからそことのとこ頭に叩き込んでおいてくださいね」

「・・・・・は「それではスタートです」

## こたつの上にインテックス その4

吹 やーん とうまーとうまー ナデナデ

上……一体何が何だった展開なのでしょう」アセアセ

禁おつはい好きの作者が望んだ幻想なんだよ。ちいさど打ち砕くんだよ「イライラ

上へい、こや、そうは言つてもいいの俺は幻想を打ち碎くなんてできなこ」「デレデレ

吹「デレデレしてるとつまも可愛い」  
「パフパフ

禁 - 二

禁「あつ！ ツンドラが恥ずかしさに耐えかねて逃げたんだよ！」

上「そのボケは古すぎて逆にシンドラマだナビ、照れ泣きダッシュ」する委員長も最高だぜーーー。」

禁「ひとつまはいつかウ」に圧迫されて死ぬと良いんだよ」=「コ

上「…………不幸だあ」

完?

空丸「おれがおっぱい好きなんて失敬な」

空蝉（久しぶりの出番……）「おっぱい嫌いなのですか？」

空丸「いやつ！ オッパイを愛してるんだ！ オッパイのために死ねる……」

空蝉「いますぐ死んでください」ドゲザ

空丸「懇願！？ 悲願！？ 哀願！？」

空蝉「冗談です。私は一応ナイスバディクール忍者設定なので主人であるあなたになにされるか不安になつたのです」どきどき一

空丸「カツコ外の感情が棒読みだよ！？ しかもその設定何！？ 中2なの！？」

空蝉「いえ、25歳です」キリリ

空丸「…………ウツ」

空蝉「ところでマスター。この話はオリジナル展開ですよね？」

空丸「ああ、バトル好き（主人公チート並みの強さ好き）の俺としては是非とも入れたかった話なんだ」

空蝉「つまり、この話が面白いかどうかが、マスターのオリジナル小説（今後執筆予定）の面白さを決めるという訳なんですね」

空丸「どうか本当に心の底から面白くなくとも面白くと褒めてください」

空蝉「次回もザンサツザンサツウ」

空丸「惨殺しねーよ！？ 全年齢対象だよー！」

完

## 第三章『特別補習（戦闘ショミレーション）』その2（前書き）

前回のおわりインデックス

禁「吹寄のおっぱいに興奮」

上「ちよちよ、インテックスさん」アセアセ

禁「吹寄の巨乳にハアハア」ズズイ

上（ま、まざい、）のままじゃ俺のイメージが……）

禁「吹寄の淫乱な胸にもつ」ドガッ

吹「……」スタスター

上「……鬼がいた」

「…………は「それではスタートです」

開始の合図と共に、四人の男が前に飛び出した。

おそらく筋力操作系の能力だろう。

上条の能力に近いものがあるが、自分だけの現実が能力を左右する限り、筋力を強めるのにも限界がある。

（真正面からぶつかる自分を創りだせ！）

上条の幻想は筋力を強化する訳ではない。あくまでそのままの自分が、“幻想”通りの動きを見せる。

四人の内、一人と正面からぶつかり、体育館に衝突音が響く。

「……よお、上条当麻。今日こそお前に勝つ

「えーっと、何度も俺に挑んで返り討ちにあつちやつた先輩……でしたつけ？」

「つるせえ……お前がいなければこの学園のエースだった男だあ……」

一人の男は左右に跳ぶ　それを割つて入るように別の男が炎を

纏つて飛び込んできた。

「うわあああああ！」

炎を纏う・・・いや、火だるま状態の男は泣き叫びながら上条の横をすり抜けた。

「くつ、暴走かつ！？」

上条は迷わずその男の腕を掴んだ。

炎が上条に燃え移り、ステージ上では悲鳴が上がる。吹寄の目に不安が見てとれた。

（炎は酸素を餌に燃えている。酸素を・・・いや、そうしたらいつも窒息する。それならって、なつ！？）

「うおおおおおおーー！」

火だるま人間の影から木刀を持つた男が飛びかかる。

空中を歩いているところから、足場を創る能力を持つていると上条は判断した。

「火だるま君、すまん！」

上条は火だるまの男を壁に投げ飛ばした。

火の能力者ならなんとかできるだろ？

・・・できなければ後で助けてやるからな。上条は心の中でつぶやく。

その一方、左手で振り下ろされた木刀を掴む。

“正確に威力を殺して掴みとる自分”を幻想したのだ。

普段から弱そうなレベル4として喧嘩を売られる上条にとつて素人に毛の生えたような攻撃を受け止めるなどとても容易いことだ。

「隙あり！！」

後ろから声がした。

能力を判断することはできないが、決定打を繰り出していくことは確かだ。

「食らうかよっ！」

上条は能力を使うことなく、宙に浮いている木刀の男の下へ潜り、そのまま上空めがけて蹴りを加えた。

「かはっ」

木刀の男の叫びとともに、『ガツン！』と床を叩く音が響く。

先ほどの声の主は重さを変える能力を持つているのだろう、新聞紙を丸めただけの棒が驚くほど重たい音を発生していた。

蹴りあげた木刀の男を新聞紙の見た方向へ吹き飛ばす。『ぐえ』

ヒー重の叫び声が聞こえた。

そうしているうちに最初の四人が再び視界へ現れる。

一人は蹴りを、一人は拳を、一人は跳びかかり、一人はスライディングタックルを繰り出している。

「どいつも、こいつもありきたりな攻撃ばかりしゃがって・・・」

上条はうんざりしていた。

男達から本気で勝ちたいといつ意思が感じられなかつたからだ。

「！」の上条当麻を怒らせるなよっ！――」

四人より早く動ける自分を幻想し、体現する。

スライディングタックルの男を踏みつけ、

蹴りの男の顔面に拳をぶつけ、

跳びかかってきた男を頭突きし、

四人目の男の拳を手で受け止める。

「ひ、ひいっ！」

男は床で失神している仲間たちを見て、悲鳴を上げた。

そうじゃない、逆だろ。

「なあアンタ。男だつたらわ、仲間がやられて悲鳴をあげるんじゃなく、その仲間のために拳を繰り出すだろ。じゃないと、誰がやられた仲間を助けるんだよ。お前が自分を守ってくれる仲間がいないと動けないっていうんなら、誰かの後でしか行動できないっていうんなら、まずは

その幻想をぶち殺す！……」

そして、上条当麻はただ一人、

体育館の上で立っていた。

「勝負あり！ 勝者上条当麻！……」

小萌先生の高らかな勝利宣言とともにステージから黄色い歓声があがる。

「ふん、レベル4なんだから勝つて当然だ。……だが、よく頑張つたな」

吹寄は満足そうに体育館を後にする。IJJで上条を褒める自分など想像したくもなかつたからだ。

その理由は彼のためであり、自分の気持ちは押し殺しているのだが、本人すらそれに気付かない。

「おめでとうなのですよ、上条ちゃん」

小萌先生の極上の笑顔に祝福され、上条はまんざらでもなかつた。

例えその後に何が待つてこようとも。

「それでは、これから補習なのですよ」

曰く、これは“特別補習”であり、補習の際に議題とする『パーソナルリアリティ』の実践演習だといつ。

上条当麻は天を仰ぐ。　そして、

「不幸だああああああああ！」

## 第三章『特別補習（戦闘ショミーシャン）』やの2（後書き）

じたつの上にインデックス

上「あー疲れたー」

禁「お疲れ様なんだよとうま」ナデナデ

上「オリジナルの展開って割にあつとこつまに終わっちゃったな」

禁「まあ、禁書編は駆け足で終わる『仮面からね作者は』『パン

上「そつこえぱ』のまえ回いた日本は『ビコビコ編』と『ジャッジメント編』って書いてたけどどうやるんだろうな？」

禁「そんなの『禁書編その2』に決まってるんだよ」エヘン

上「・・・・全部アドリブか？」

禁「勢いでじうにかなるんだよ」エヘン

上「・・・・不幸だあ」

完？

とある作者の未来予測

空丸「まあ、作者的にはジャッジメント編　一通編のほりが盛り上がると思つてます」

空蝉「ほり、それはなぜですか、マスター」

空丸「ジャッジメント編はなんと上條鷹麻がジャッジメントのHースとして活躍する話なのです！」

空蝉「ほほー！　それはジアンカもマホカンタだね」

空丸「海外のテレビショッピング風に言いたかったんだらひねり、それだけのドランクHだから！」

空蝉「それでそれで、ジャッジメント編つてことは、白井や初春との濃厚かつ大胆な描写がバンバン飛び交うところですねー！？」

空丸「空蝉は俺の煩惱の塊だもんな。でも、中学時代だぞ？　中学男子なんて、妄想しかできないへタレの集団だぞ？」

空蝉「お前それへタレ集団に囲まれても言えんのかよ？」

空丸「・・・助けてージャッジメントやーん！」

空蝉「・・・それでは次回もザンサツザンサツウ」

空丸「それ流行らないからねー！」

## 第四章『聖人』その1（前書き）

前回のおわりインデックス

禁「作者が寝ずに仕事に行つたら死にました」

上「それ読者に関係ないから!!　俺の幻想体現が戦闘用に優れています」と乱闘で証明した回でした!!」

禁「・・・ひ、らん」　「ブフニッ」「ゴスッ

吹「・・・」　「スタスタスタ

上「キャラ崩壊・・・不幸だあ!!」

「・・・不幸だあ」

第七学区のとある高校に通つて「る」へ普通の高校生「」と上條当  
麻は今まさにピンチを迎えていた。

家に食材がないのである。

補習の疲れ（大半は特別補習のせい）と夏の暑さから、部屋から  
出る気になれない。

しかし、「」のままでは空腹で死んでしまう。

究極の一択を上條当麻は「」口しながら悩まされていた。

「五時前か。いまならタイムセール間に合つかな」

「・・・な、なんだこれ」

行きつけのスーパー（卵が安い、とにかく安い）にたどり着いた上条は狼狽した。

このスーパーを通り始めて以来の人だかりが彼の行く先を阻んでいたからだ。

「あ、あのー、ちょっと失礼しますねー」

とにかく食材だけでも手に入れねば。

上条が人だかりを分け入るとそこには純白の布がすごいスピードで動いていた。

「・・・・・・・・あ？ インデックス？」

布の中の人は間違いなく朝ベランダに引っかかっていた少女だ。

口の周りを試食のソースで汚している。

「あ、ヒーまー！ 半日ぶりなんだよ」

インデックスは上条に話しかけながらも、猛スピードで試食コーナーをめぐっていた。

そして彼女が通った後には山盛りにあつた試食が一瞬でなくなっている。

「な、何じてるんでしょつかインテックスさん・・・」

「ヒーます」いんだよーー。この国にはお金を持ってない不幸な子羊を救うための制度『試食』があるんだよー。すじいねヒーま

ヒメラルドの瞳を輝かせ天使のような笑顔を見せるインテックス。

いたずらな子供相手に百戦錬磨を誇る店員（上条談）も注意することができないくなっている。

「あー、や、そつか。それじゃあ存分に楽しめ・・・上条さんはちよつと用を」

わづくつと後ずさりをする上条の後ろに立つて立た。

「お客様？」のシスターさん。の保護者なんですね？ そりなんですね？」

殺氣すら感じじる店員の笑顔に上条はつんだれながら、

「はー。やうでーぞこますですよ」

諦めるしかなかつた。

「ヒー飯　　ヒー飯　　ヒーまがヒー飯を作ってくれるー

試食コーナーに置いてあつた食材を一つずつ全種類買わされ、上条は両手に袋を持って帰り道を歩いていた。

「・・・はあ、ソーセージとワインナーとハムばっかりひっかか  
て言つんだよ・・・」

上条の落ち込みなどまったく知る由もなく、インテックスはスキンシップしながら彼の少し前を歩いていた。

「とーまとーま この国も捨てたもんじゃないね」

嬉しそうな顔でインテックスが振り向く。

極上の笑顔に上条は思わず顔を赤くした。

「な、何ですか？」

（こ、にやけるな、我慢だ俺っ！）

「だつてね・・・最初この国、ううん、学園都市に来た時、誰も他人なんて見てなかつたの。自分のことで精一杯つて感じで・・・でもね

上田づかいで上条に近づくインテックス。

「とーまは私に一度も親切にしてくれた。見ず知らずの私を助けてくれた。それは簡単にできるようでのこの学園都市じゃとても難しいこと。それを簡単にできる人間が一人でもいるつてことはとても素晴らしいことなんだよとーま」

（・・・・・ああ、そうか）

上条は気が付く。

インデックスは今もなお何かに“追われている”。

そんな彼女が誰かに助けを求めることができるだらうか  
できるはずがない。  
いや、

なぜなら、他人と関わることは、その人を巻き込むことになるの  
だから。

「とーま。美味しい料理作ってね？」

上条は思う。

「」の小さな、とても小さな女の子ばかりほどの苦しみを背負つて  
いるのだろう。

異国の方で独り、理由も分からず命を狙われ、誰も頼ることがで  
きないなんて……。

「インデックス……任せろ。全て俺に任せや」

上条は覚悟する。

少女の重荷を少女」と背負つ。

そして必ずこの闇から救つことを。

「……？」飯の量も多くしてね？」

小首を傾げるインデックスの頭をぽんぽんとになると、上条は笑いかけた。

滑稽ですね。

「…………！」

「」からか透き通った声が一人の耳に届く。

その言葉が何を指しているのか分からなかつたが、“敵”であることは理解した。

そして上条は臨戦態勢を整える。

「……滑稽だと言つたのですよ。あなたの覚悟が

田の前に現れたのは 女だった。

左右非対称の服装、白いTシャツにジーパン（片方を極限まで短く切つている）。

上条当麻は確信する。

間違いない。この女は

痴女だ。

「とーま・・・逃げるんだよ。一心不乱に後ろを振り返らざる逃げるんだよ」

インデックスの瞳が恐怖で満ちている。

こいつが。

田の前のこいつがインデックスを。

「私の名は神裂火織。イギリス清教・・・と言つてもあなたには分からぬ話ですね。今すぐその少女を引き渡しなさい」

神裂と名乗る女は、腰まで伸びた黒い髪を揺らしながら右手を差し出す。

おとなしくインデックスを引き渡せ、と。

「インデックス・・・これ持つてる」

上条はスーパーの袋をインデックスに渡した。

その意図は一つ、スーパーの袋を守ることと、インデックスを戦闘に参加させないことだ。

「とーま、お願いなんだよ。適つはずがないんだよ。相手は刀も持つてゐるんだよ」

インデックスの瞳が恐怖から不安の色に変わる。

目の前に自分の命の危険を脅かす相手がいてなお、他人の心配をするのか。

上条は拳を握り込み、口を開いた。

「よく分かつたぜ、神裂。お前がそんなにインテックスの命が欲しいなら。こんな無力で怯えた子供を殺したいって言うのなら。まずはこの上条当麻が

お前の幻想をぶち殺す！！」

## 第四章『聖人』その1（後書き）

## こたつの上にインデックス 【第四回目】

禁「けつ、とうまいい、作者といい、ちつぱいの魅力を分かつてないんだよ」

止めたんだ、インチケヌもん」アセアセ

禁「あいつらは結局自慢の胸を披露したいがためにサイズの小さいTシャツを着たり、体操服の上着を肩に乗せて胸の部分は薄い体操服で強調したりしてるんだよ！」

上（おつぱこ）の笑（わら）等（とう）感（かん）のせいでおさらインテックスも荒（あら）れてたのか・・・

上巻・インテックス

禁 - なにかな? ギロリ

「お前は今でも十分魅力的だよ」キテリ

禁  
—  
・・・え  
／／／／  
テレテレ

上「それにまだまだ成長期だ、（そんだけバカみたいに食つてれば）  
その内あいつら顔負けのナイスバディになるさ（腹が出るだけの場  
合もあるけどな）」

禁「・・・と、いつまのエッチ／＼」『テレテレ

小萌「では、先生はどうすればいいですか上条ちゃん？」一ノ瀬

上「・・・・・え」

小萌「私は成長期過ぎてますが未だに道具なしでブレー キが踏めません。どうすればいいですか」ニコッ

上………揉めば成長するかと「ワキワキ

# 女性陣 かみじょんじんじん

旦 だあ ああああ !! ! 不幸だあ ああああ !! !

完  
?

空丸「えー、」のたびはとてもうれしことがありました

空蝉「運命ちゃんが「メントを残してくれた」とですね」フムフム

空丸「ええ！？ 先に言つちゃうー？」

空蝉「感動して相手のプロフへ速効飛びましたこの人」

空蝉「そのほかにも登録者数が増えていないか、何度も何度も確認したりしてましたこの人」

空丸「・・・・・恥ずかしすぎてメガンテ撃ちたい」

空蝉「上條当麻の持ち味を生かしつつ、自分なりの世界観を溶け込まして、ようやく作品を創つていきましたので、これからもよろしくです」

空丸「それ俺の台詞だよねつ！？」

空蝉「他にも「メント頂けたら、泣いて喜びます。いえむしりこ  
つ泣かせます」ゲシゲシ

完

## 前回のおさらいインデックス

上「今晚のおかずはソーセージハムワインナーの盛り合わせ」

# 禁 - 楽しみなんだよ

上  
卷

禁「どうしたのどうま？ 生ハムも欲しかった？」

禁 - そんな口を立てねえ、上級神なんだよ

上 原作いやあ、けなぐ負けたよな

禁 ても 今日は幻 想 体 現 が あ る し い け る ん だ よ

上「 そうだなーー！ がんばってくぜーー。」

禁・上「おつぱいのために...」

## 第四章『聖人』その2

「　　お前の幻想をぶち殺す！！」

言葉と同時に上条は神裂の目の前へ移動した。

今できる最速の幻想体現　イマジンブレイク　。

これならどんな奴でも反応できないはずだ。上条は力強く右手を挙げる。

「食らいやが　　え？」

しかし、上条の考えは完全に外れた。

虚をつかれたのは、自分だった。

「・・・七閃」

横から突き刺すような殺氣に、上条は背筋を凍らせる。

（・・・人間がこんなにも殺氣を出せるもんなのか！？）

圧倒的優位な中で、神裂もまた動搖していた。

（今の動き、私と同等かそれ以上・・・。聖人の動きができるなんてこの少年は一体・・・）

動搖はあるものの、神裂は次の手に出る。

神裂は上条の動きを止められる程度の威力に落として七閃を放つた。

それでも普通の人間なら簡単に気絶する威力だ。

振り下ろされる刀。

「いやああああ！」

インデックスの叫びは刀と肉の触れる音でかき消される。

「・・・・・なつ！？」

間一髪だった。

上条当麻の人生において刀を相手にするのは初めてであり、軌道を読めるはずもなかつた。

彼のとつた行動は一か八が、いや一か百かくらいの賭けだ。

「なつ！？ 前に！？」

神裂の誤算は目の前の少年、上条当麻を一般的の素人だと決めつけたことだ。

四肢がなくなりうと戦い続ける覚悟のないただの少年だと。

その考えが甘かつたと気付いた時にはすでに彼女は宙へ浮いていた。 上条の拳によつて。

「……はあはあ。」の上条さんを廿八見てももうつらは困るのです  
「」

シャツの右肩が真っ赤に染まる。

覚悟がなければ簡単に意識を失う致命傷だ。

上条は全身の力が抜けていくのを感じた。

「いやあああああ！　とーまー　ヒーまーーー！」

インテックスが泣き叫びながら近寄つてくる。

「ううううう、そんな慌てたら袋の中身が飛び出しちま  
」

殺氣。

殺氣殺氣殺氣。

上条はどす黒い色　　そう表現するしかない何かを感じた。

「…………Salvareooo（救われぬ者に救いの手を）

・・・・・唯閃！――！」

上条に襲いかかる無数の痛み。

「つああああああ――！」

上条はただ叫ぶことしかできず、宙を舞つた。

同時に全身から血が噴き出す。

「あ・・・ぐ、ぐつ・・・そ」

地面にたどり着いた時、上条の意識はもはや途切れかけていた。

「・・・なかなか手こずりました。  
先ほどのあなたの行動は私の予測をはるか上にいきました。  
なので仕方なく魔法名を名乗らせていただきました。  
あなたがなおも立ち上がるというのなら、少女を助けるなどと戯  
言を言つのであれば、私は・・・あなたを殺す」

神裂は覚悟した。

「この少年はもはや無関係の一般人などではない。

“私たちの計画”を破壊する恐れのある重要人物だ。

刀を握る力が必然的に強くなる。

「・・・ぐ、ぐつ」

上条の耳には神裂の言葉はほとんど届いていない。

届いていたとしても選択肢は一つしかなかった。

「とーま。駄目なんだよ。立ち上がつたり殺されるんだよ・・・」

インデックスが泣いている。

上条もまた泣きそうな顔で答えた。

「・・・『めんなインデックス。他人の』ことばかり考えるお前をまた悲しませるかもしない」

そして、上条当麻は立ち上がる。

「さて、続きだ、神裂火織」

傷の痛みなどまったくないかの」と力強く。

「なつ、痛みで立ち上がる」とはおろか喋る」とありできなにはず

実際、痛みはそれくらいあるのだろうな。上条は苦笑する。

痛みを消し去る幻想を体現している彼にはどれほど苦痛か分からなかつたのだ。

「お前・・・それだけ強くて、それだけ正しい目をしていて、なんでだよ。インデックスは普通の女の子じゃないか。お前の中にそれを許せる心なんて存在してないはずだ・・・違うか神裂!...!」

悲しみに満ちた瞳。

何があつても目的を遂行する強い意志。

上条は理解していた。

彼女がインデックスを襲うことには理由があり、それがいかに彼女自身を苦しめているのかを。

「…・・・さい」

一方、神裂の中で黒い何かが弾けた。

それは迷いであり、悲しみであり・・・怒りであつた。

聖人である自分が七閃を使うことは、人間の枠を超えた動きを許可することであり、何度も使えば肉体にダメージが来ることは理解していた。

しかし、使う。

この少年だけは、上条当麻だけは何が何でも倒す。

完膚なきまでに、  
“自分が正しい”と  
“”を証明するためには

(ああ、なんて、へらそ、なんだ。)

上條[トヨヒラ]もはや神裂は敵でなかつた。

彼女もまた何かに苦しみ、戦い、もかしている。

そして、神裂火織は自分の言葉を引き金に暴走した。

「……待つてろよ、神裂。お前のいる世界を知らないが、お前の苦しみの正体を知らないが、お前の希望を知らないが、俺はお前も一緒に救つてやる！――」

上条は強く幻想する。

身体全体で七閃の軌道を解析し、その後来るであろう唯閃を脳で予測し、神裂の力を奪い取る。

そんな夢のような幻想を体現するために。

「なつ！？」「

神裂は驚き以上に恐怖を感じた。

魔法名を名乗り魔術で強化された七閃唯閃をかいぐる人間がいることを。

そしてその少年は卒倒するよつた傷を負つていぬ」と。

その時にいるもの全員にとって予想外のことが起きる

る。

上条にとつては目の前にインデックスが現れたこと。

その時は魔法と呼ばれる全ての異能を無効化する幻想を体現した。

インテックスにとつては、“歩く教会”が作動しなかつたこと。  
神戸の「モミジ」を受け、「痛み」を削る。

神裂も同様に“歩く教会が作動しなかつたこと”が予想外だつた。彼女を全てから守り、傷一つつけないことを誓つた自分がインテックスを傷つけてしまつた。

そして、インテックスは背中から仰向けに倒れる。

肩から腰にかけて一直線の刀傷ができる。

## その場に崩れる神裂。

インテックスを守る  
彼女を支えていた根幹が折れてしまつ

たのだ。

「い、インデッ・・・クス」

上条もまた地面に突つ伏した。

意識が途切れ途切れになる。

とつぐに限界は超えていたのだ。

タイミング悪く、いや、この場合とてもなく良かつたのかもしない。

「やれやれ、なんて様なんだ、神裂火織。聖人が泣いていたらいつたい誰が救いの手を与えると言つんだい？」

咥えタバコを捨て、夕日より赤い髪をかきながら、男　スティル＝マグナスは現れた。

「・・・・・ま、待て・・・」

上条は体中に残ったわずかな力をかき集め、右手をスタイルに向ける。

「・・・ん？　ああ、君か？　無関係な人間は　そこでぐたばれ」

最後の言葉を聞くまでもなく、上条当麻は氣絶した。

誰一人救うこともできずに、氣絶した。



## こたつの上にインデックス

上「いやあー、これもまたオリジナル展開だよな。神裂と俺が戦うのは原作に近いけどさ」

禁「とつまはかつ」良かつたんだよー。それに比べてアニメで私のことを“これ”扱いしたあいつの空氣のぶりつたうもひ・・・ジ

ス「ちよつ！ 僕のこと覚えてないからってひどい扱いはやめてくれよ！」

神「上条当麻・・・//」ボ才一

禁  
・ おつぱいがまたとうまの餌食に・・・

上「誤解を存分に含む言い方やめてーーー！」

ス「さすが猿だな。おっぱいを口にふ、含むなんて//」

禁・上・神

ス「えええええ！？」 ひどいよ・・・グスン」 シタシタシタ

神「そういえば上条当麻。」の場合、私の勝ちで良いんですね？」

上「俺は別に勝ち負けにこだわってないし、神裂の判断に任せるぜ」「口ッ

神「・・・／＼／＼ そ、それじゃあビビリールにのっとって、  
上条当麻は一日私の好きなようにしていいんですね・・・」

上「・・・・・・・ダッシュ！…」

禁・神「あ、逃げた・・・」

完？

空丸「みんながコメントくれて嬉しいよウ（フ・・）」

空蝉「よしよし、こいこいこい」ナイトナイトナ

空丸「珍しく空蝉が優しい（（（（；。。。）））ガクガクブルブル」

空蝉「大丈夫、みんなお情けだから」

空丸「つおおおおおおい！…！ 禁句、それ禁句だから…！…

・・・だんだんキャラが銀魂の神楽ちゃんみたいになってきたな・・・

空蝉「え？ きやんたま？」

空丸「つおおおおおおい！－！－！俺をぱつつかんにすんなよマジで－！」

空蝉「でも、本当に当人飛び跳ねて喜んでますのでこれからも暖かい応援してくださいね」ニコツ

空丸「・・・お前がいつな

完

## 第五章『共有』（前書き）

前回のおわらイントラックス

禁「私のお腹がぽぽぽほ～ん（、 、 \* ）」

上「俺の全身がさよなライオン（、 、 ）」

神「あわわわわ、 どちらも私のせいで」 デゲザ

禁「大丈夫なんだよつー！」

上「そうだぞ神裂！ 大丈夫だつー！」

神「ふ、 二人とも…」 ウルウル

上・禁「「後でパフHおじつてもらいつからなつ」」

神「・・・・・」

土「やつと今回おれの出番じゃー」

禁「それじゃあ、 楽しんでみるんだよー！」

いつからだらう。

いつから幻想するよになつたのか。

いつから体現するよになつたのか。

いつになつたら体現できるのだらうか。

いつになつたら……。

「……上条は？」

見覚えのある和室。

部屋の隅にはビルの空き缶が溢れている。

灰皿には無数のたばこがひしめいていて、上条は「」がどこか気が付く。

「上条ちゃん……大丈夫ですか？」

ああそうだ、小萌先生の部屋だ。

上条当麻は安堵した。

ウサギのパジャマ（小学生用）を見事に着こなし、不安そうに覗き込んでくる成人女性に上条は思わず吹き出した。

「あーー！ 今私のことを幼稚園児だと思いましたね！ 仮の小萌も許せることと許せないことがあるんですからね、ふんふんっ！」

「あはは、小萌先生（の服）があまりに可愛かったので、思わず笑っちゃいました」

「・・・・・、し、式がイコールで結ばれないのですよっ！…」

ふいっと、顔を真っ赤にして横を向く小萌。  
その理由を上条が理解することはない。

「かーみやーん 僕のことを無視したら悲しいにゃー」

土御門元春はいつもの調子で上条に話しかける。

金髪にサングラスとチンピラの原型のような姿をしているが、れつきとした高校生だ。

「土御門・・・、ああ、そういうことか。すまん」

上条は土御門が自分の胸を右手で押さえているのを見て事態を把握する。

「それにしても、上条ちゃんのこの能力は長年能力研究してきた私でも理解不能です。他人の能力を共有するなんて」

上条当麻には幻想体現が生んだイレギュラーな能力があった。

他人の能力を共有し個人で発動する」ことができる。  
身体のどこかが触れ合っていること、知り合い以上の関係であることなどの発動条件はあるが。

「本当は抱き合つてゐるほうが威力強いんだにゃー。でも小萌ちゃんが止めるから止めてあげたにゃー」

確かに、触れ合つてゐる面積が大きいほど上条の使える威力は増す。  
が、この時ばかりは心の底から小萌に感謝した上条がいた。

「それにもかみやんは昔から本当に傷が絶えないにゃー。その度に駆り出される身にもなつてほしにゃー」

すまん、上条は一言謝ると全身に力を入れて起き上つた。  
傷の痛みはあるが動けないほどではない。土御門の再生能力のお陰だ。

「む、無理しちゃだめなのですよー。肉体は再生しても、寝ている間も能力を使用したのだから体力は回復してないのですよー」

泣き顔で訴える小萌の頭をなでながら上条は立ち上がる。

「・・・行かなきや」

上条には理由があつた。

「ちょっと、女の子を一人助けてきます」

そして上条は幻想を体現し、その場を去つた。

「やつぱり女の子なんですね。上条ちゃんは・・・」

少し悲しそうな小萌に土御門は笑いながら答える。

「大丈夫、小萌先生には青髪ロリコンがいるにゃー」

その冗談は笑えません。と、小萌が笑顔に戻る。

（それでも・・・あそこにはかみやん以外の血があつたけど、一体だれの・・・）

土御門はサングラス越しに過去を予測するが、結局想像でしかな  
い。

すぐに諦めた。

## 第五章 『共有』（後書き）

こたつの上にインテックス

「え、俺の出番にこれだけゼよー?」

神一 そうです。あなたなどそれだけで十分です」

「ね、ちんそれはひいせぬ」 ウルウル

神、あなたの泣き落としなど私に通じる訳がないでしょ!!」カツ

ウルウル

「神様…仕方ないですね。」  
「許してあげます…（泣き声）」  
「つま可愛い…」

「…………なんで俺が謝罪してるとこになつてるんだにゃ——————！」

空丸「いよいよ大詰め！ 最終章に入ります！」

空蝉「とつても短かつたね！！」

空丸「いいの！！ 人物像とか因果関係は脳内補てんで許して！！」

空蝉「そんなことでも本当にジャッジメント編へ行けるの・・・？」

空丸「空蝉に心配されたーー？」

空蝉「一応シナリオはできてるみたいだけど、なんていうか執筆できてないよ最近」

空丸「（ 、 、 、 ）ウツ…」

空蝉「応援してくれてる皆のためにも頑張りつつ？」

空丸「（つ ） ワカッタ」

空蝉「がんばるんでこれからも豚をよひじくお願ひしますーー。」

## 最終章『全ての終わつ』（前書き）

こたつの上にインテックス 前書き編

禁「寝てたんだよ！」

上「ああ、俺らの物語を放つて寝てた

禁「しかも17時間も！」

上「ああ、あいつは能力者だな。『過剰睡眠』だ！」

空丸「……申し訳ありませんでした」

禁「まあ、そんなことよつ楽しんでみるんだよー。」

## 最終章『全ての終わつ』

いつからだろ？

いつから幻想するようになつたのか。

いつから体現するよになつたのか。

いつになつたら体現できるのだろうか。

いつになつたら……。

「……？」

見覚えのある和室。

部屋の隅にはビールの空き缶が溢れでいる。

灰皿には無数のたばこがひしめいていて、上条は「……」がどこか気が付く。

「上条ちゃん……大丈夫ですか？」

ああそつだ、小萌先生の部屋だ。上条当麻は安堵した。

ウサギのパジャマ（小学生用）を見事に着こなし、不安そつと覗

き込んでくる成人女性に上条は思わず吹き出した。

「あー！ 今私のことを幼稚園児だと思いましたね！ 仮の小萌も許せることと許せないことがあるんですからね、ふんふんっ」

「あはは、小萌先生（の服）があまりに可愛かつたので、思わず笑つちゃいました」

「・・・つ、し、式がイコールで結ばれないのですよ！」「

ふいっと、顔を真っ赤にして横を向く小萌。その理由を上条が理解することはない。

「かーみやーん  
俺のことを無視したら悲しいにやー」

土御門元春はいつもの調子で上条に話しかける。

金髪にサンクテラスとヨンヒラの原型のよつな姿をしているが、高校生だ。

「土御門……、ああ、そういうことか。すまん」

上条は土御門が自分の胸を右手で押さえているのを見て事態を把握する。

「それにもしても、上条ちゃんのこの能力は長年能力研究してきた私も理解不能です。他人の能力を共有するなんて」

上条当麻には幻想体現が生んだイレギュラーな能力があつた。

他人の能力を共有し個人で発動することができる。

身体のどこかが触れ合っていること、知り合い以上の関係であることなどの発動条件はあるが。

「本当は抱き合つてゐるほうが威力強いんだにやー。でも小萌ちゃんが止めるから止めてあげたにやー」

確かに、触れ合つてゐる面積が大きいほど上条の使える威力は増す。

が、この時ばかりは心の底から小萌に感謝した上条がいた。

「それでもかみやんは昔から本当に傷が絶えないにやー。その度に駆り出される身にもなつてほしいにやー」

すまん、上条は一言謝ると全身に力を入れて起き上つた。  
傷の痛みはあるが動けないほどではない。土御門の再生能力の陰だ。

「む、無理しちゃだめなのですよー。肉体は再生しても、寝ている間も能力を使用したのだから体力は回復してないのですよー。」

泣き顔で訴える小萌の頭をなでながら上条は立ち上がる。

「・・・行かなきや」

上条には理由があった。

「ちょっと、女の子を一人助けてきます」

そして上条は幻想を体現し、その場を去つた。

「やつぱり女の子なんですね。上条ちゃんは・・・」

少し悲しそうな小萌に土御門は笑いながら答える。

「大丈夫、小萌先生には青髪ロリコンがいるにやー」

その冗談は笑えません。と小萌が笑顔に戻る。

（それにしても・・・あそこにはかみやん以外の血があつたけど、一体だれの・・・）

土御門はサングラス越しに過去を予測するが、結局想像でしかない。すぐに諦めた。

第七学区の廃ビルの一角。そこは普段ならお化けビルとして恐怖の対象とされるのだが、今は誰も気にせず通り過ぎていた。

スタイルの魔術でこのビルの存在を“消し去った”からだ。

「一体どうすれば・・・」

神裂は自分の無力を呪つた。

「はあはあはあ・・・」

神裂の田の前には包帯に巻かれた少女が横たわっている。

傷は深くこのままでは少女の命を脅かすことにもなりかねない。

「僕の魔術で治してやる・・・と言いたいところだけど、残念ながら応急処置しかできなかつた。学園都市の病院はEDのないインデックスは診てもらえないだろ?」

ステイルもまた悔しさに満ち満ちている。

それでも冷静さを失わるのは取り乱したところインデックスを救えないことを心から理解しているからだ。

去年、泣き喚き、取り乱した自分はもういない。

「結局、私たちの選択は正しかつたのでしょうか?」

「インデックスを追いかけることがかい? それとも彼女の記憶が消えなくてもいい方法を探すのを諦めたことかい?」

ステイルは不機嫌そうに言つた。

「彼自身何度もその疑問にぶつかり、悩み、今もなお苦しんでいるからだ。」

「両方ですが、今はインデックスを追いまわす方法をとつたことです。たしかに一年ごとに記憶が消える彼女にとつて楽しい記憶でふれさせることは最後に辛い思いをさせることとなります。ですが、苦しい思いを積み重ねたところで、最後に辛い思いが軽減されたところで、彼女が幸せだとは・・・思えないのです」

神裂は思い出す。去年、楽しそうに笑うインデックスを。最後に『忘れないよカオリ』と言しながら記憶が消えてしまったインデックスを。

「彼女が完全記憶能力を有し、禁書目録として選ばれている以上、多くの苦しみは背負わなくてはならない。だから僕らも彼女とともに苦しむ。そう決めたんじゃないのか、神裂火織」

スタイルの睨みに神裂は目をそらす。  
彼がどれだけ苦しんでいるのか分かった上で自分は愚痴をぶつけたのだ。これじゃあ聖人でもなんでもない。

神裂は地面を強く殴つた。

「……いずれにせよ、このままじゃインデックスが死ぬ。医者を齎しても何とかしない」「待てよ」

スタイルも神裂も驚きのあまり立ち上がった。このビルは完全に世界から切り離されていたはずだ。

「これが魔術か。本当に便利なんだな」

上条は鼻をさすりながら歩み寄る。

「いったい……どうやって、魔術師のお友達でもいるのかい？」

スタイルの質問に上条は笑いながら答える。

「いやいや、上条当麻は腐つても化学側の人間。魔術師の知り合いなんてインデックスとあんたたちくらいだよ」

そして上条は説明を始める。

「第七学区にいることは分かつっていたんだ。傷だらけのインデック

スを連れまわすことはないだろうし。でもいくら探してもいい。で、気付いた訳よ『ああ、魔術がなんかで消えてるんだな』って。こればっかりは賭けだつたけどな。もしテレポートみたいな魔術があつたら終わりだし』

上条は続いておでこをさする。

「・・・質問の答えになつていないとと思うんだけどね」

スタイルは苛立ちを隠せない。いつも魔術で殺してやるつかとさえ思つていた。

「ああ、そうだな。答えはこれさ」

十メートルくらい離れていた距離を上条は一瞬で詰めた。

「第七学区を直線上に走り回つただけさ。そして何もない場所で何かにぶつかった。そしてそれが建物だと分かつた。もちろん、常に魔術を消す力を使つていた」

スタイルと神裂は呆れていた。われわれが転移魔術でイギリスに帰つていたらこの男は一日中この学園都市を往復し続けたとか。

「は、はははっ！ 猿の考へることは僕には一理解できそうにな  
い！」

皮肉を言いながらスタイルは右ポケットからカードを取り出す。ルーン文字が書かれているそのカードは彼が魔術を使うのに必要不可欠なものだ。

「ちょっと待て、俺はお前らと戦うつもりはない。……インテックスを治しにきたんだ」

そして上条当麻は説明する。

自分には能力を共有する力があること、そしてたった今肉体再生の能力を共有したことを。

「時間がないんだ。一度共有した力は離れてもしばらく使えるけど、そう遠くないうちに消えてしまう」

魔術側の一人にとって、学園都市の能力など何一つ信じられなかつたが、選択肢が多くないのも確かで、その中で一番手早く行えるものではあった。

「……分かりました。上条当麻。命がけで彼女を守りたいとしたあなたを信じます。……が、もし助けられなければ私はあなたを斬ります」

神裂の言葉が嘘であると上条はすぐには気付いた。それはたった今試している。もし神裂の言葉に不安の色を見せれば、別の方法を選択するつもりだ。

「信じてくれ神裂。俺はお前のことも助けたいんだ」

真剣なまなざし。

「なつ……」

斬られた相手を助けたいなどと。神裂は心臓の高鳴りを感じた。目の前の頼りなさげな男に身をゆだねたい。そう感じたのだ。

「・・・で、実行するにあたってなんだけど。まずステイルとかいふお兄さんはこの場から離れてくれないかな?」

上条の言葉にステイルは激昂した。

「なぜだ!! 僕はインデックスのためなら死ねる! 彼女が死にそうな時になぜ離れなければいけないんだ!!」

「いや、だつて・・・今からインデックスは裸になるし・・・」

その言葉にステイルと神裂に再び敵意が溢れる。

「ちよちよちよつ! だつて仕方ないだろ! インデックスの服は異能の力を防御するんだろ? だつたら俺の力を防がれるかもしれないじやないか! それに、俺の能力は触れ合ひ面積が広いほど、また密着度が高いほど能力の威力が高まるんだよつ!」

そして上条は服を脱ぎ捨てる。神裂は顔を真つ赤にして目をそむけるが、ステイルは彼を見て絶句した。

上条の上半身は先ほど神裂につけられた傷以外にも無数の傷があつた。

普通なら生きられるわけがないような大きな傷もある。どれほど修羅場をくぐりぬければそうなるのか。

ステイルはたばこを吐き捨て踏みつぶすと、部屋から姿を消した。

「・・・え、えーっと、神裂さん。俺みたいな身体を見るの嫌でしょうけど、あなたにはインテックスを脱がして俺をインテックスのところまで案内する役目があるのですが」

上条さんは紳士なので、目をつぶっています。そうして上条は目を閉じた。

「・・・えつ？ エツ？ エエー？」

状況を理解した神裂はただただ慌てる」としかできなかつた。

「で、できました上条当麻。さ、いきいへ」

インテックスを裸にして上条当麻をそこへ案内する。  
それだけのことが神裂には手間取つてしまつ。

未成年の彼女は未だ男性の裸はおろか手さえ握つたことはないのだ。

恥ずかしさで爆発してしまいそう。  
神裂も目をつぶつてしまいたいと思つていた。

しかし、実際目の前に上条の身体があると、思わず見入つてしまふ。

傷だらけの身体は思つた以上に華奢で、そんな触れたら壊れそうな上条当麻は聖人である私を救いたいと言つたのだ。

神裂の心にゅうくじと上条が浸透していく。

無事上条をインテックスの前に座らせると、神裂はインテックスを抱えあげ、上条の膝の上に置いた。

ちょうど恋人がテレビを見ながらこちやついているような大勢になっている。

（・・・「いやましいかも。・・・はつ、いけませんいけません／＼）

神裂は自分の心に生まれた邪念を、首を振ることで必死に消そうとした。

（インテックスの傷を回復する）と全力をかけるんだ・・・）

本来、土御門の肉体再生は現在上条に作用していた。  
それをインテックスに移すといつことは、必然上条の身体は傷の回復をやめる。

「くつ・・・くう・・・

上条の身体から血が溢れだす。

「な、なんで！？」

神裂は慌てた。

上条の説明はインテックスを治すことであり、自分が傷つくことではなかつた。

そしてその傷がなんであるか気付く。

「私の・・・せい」

神裂が傷つけた少女を癒すために神裂が傷つけた少年が傷を負いながら犠牲になっている。

「はあはあ・・・いいんだ、神裂。これは俺が選んだこと。誰のせいか決めるなら間違いなく俺のせいだ」

目を閉じたまま、意識をインデックスに向けながら、神裂のことを気遣う。

上条当麻という男の本質に、神裂は涙を流す。

聖人が涙を流していた時、上条当麻はとてもない不安に心を押しつぶされそうになっていた。

インデックスに土御門の能力を与える一方で、上条の幻想体現はインデックスの“力”を共有しはじめていた。

「かみじょ　　「なつ、なんだこれ！？」

神裂の言葉を待たず、上条の身体がびくんと跳ねた。

神裂は気付く。

「インデックスの目に魔術式が！？」

『接触している人間に魔術書が複写される可能性を感知。ただちに迎撃し危険を回避します。

神裂は戦慄した。

少女は魔術を使えないはずだ。

ならば目の前の少女から溢れだす魔力と魔術の構成術式はなんだ。

「上条当麻！ 危険です！ 今すぐ離れなさい！」

予想外だった。

まさか自分が上条の安否を気にするなんて。

神裂は自分の心の変化に戸惑った。

「駄目だつー！ あと少しで傷が完全に消えるんだよーー！」

「それほど回復しているなら大丈夫ですー！」

神裂の言葉に上条は優しく答える。

「・・・ばかやつ。女の子の身体に傷跡なんて残せねーよ」

『

』

インデックスから冷たい声が漏れ出ているが、上条は五感を遮断してインデックスの治療に集中した。

(後・・・一分)

「いけませんつー！」

神裂は上条を無理やりひきはがし距離をとる。

「何すんだよ、神裂！ 後、いつふ・・・ん？」

上条の視界にはとてつもなく巨大な 穴があつた。

「竜殺しの息吹か・・・なんて厄介な」

いつの間にかスタイルも横にいた。

なぜか目線を下に向けて顔を真っ赤にしている。

「何やつてんだ、スタイル！ そんなんじゃ攻撃を避けられ・・・！？」

そこには宙に浮く裸体の少女がいた。

「・・・か、上条さん、知らなかつたので」じれりまするよ

「次、来ます！・・・」

巨大な魔術式が展開され、そこから凝縮された光がレーザー光線のようにならつ！ 右手を突き出してレーザーを迎撃つ。

「くっ！ うおおおおおお！」

上条は一步前に踏み出す。

「ドランブルレスを止めるイメージはわかない。・・・しかし、受け流すならつ！ 右手を突き出してレーザーを迎撃つ。

想像を絶する衝突が起きた。

レーザーは上空に軌道を変える。

上条当麻が捻じ曲げたのだ。

レーザーが通った上空から光輝く白い羽根が無数に降つてくるが、まだ三人とも気付いていない

それが何を引き起すものなのか。

「な・・・、最高位魔術を素手で捻じ曲げるなんて」

「この男がいれば何とかなるのかも。

スタイルの中でほんの小さな希望が芽生え、そして上条の言葉で打ち消される。

「・・・次は無理だ。一人とも逃げろ」

上条の言葉を神裂は否定し、スタイルは笑いながら答えた。

「これだから猿は物覚えが悪いと馬鹿にされるんだ。僕たちは彼女のために生きている。それなのに逃げるなんて選択肢があると思つているのかい」

そして、三人は笑い合つ。最後の覚悟を決めたのだ。

「スタイル、お前は何が使えるのか知らないが全力でさつきのを迎撃してくれ。神裂、こつちく」

言われるがままスタイルは魔術を構成する。

神裂は上条の前に立つた。

「神裂、お前が今後誰かを好きになつてそいつと結ばれた時、今から起きたことを後悔するかもしれない。だけど、・・・許してくれ」

「・・・何を！？」

上条は神裂を抱きしめた。

唇が触れ合つほど強く密着している。

「・・・か、かみじょいづま・・・」

神裂は顔を真つ赤にし、まともな思考力を失いかけていた。

そこへ上条がささやく。

「神裂・・・跳ぶぞ」

そして、上条と神裂はその場から 消えた。

上条は神裂の聖人としての能力を共有し、使用した。

スタイルの最大にして最高の魔術『魔女狩りの王イノケンティウス』はドラゴンブレスをまともに受けながらも善戦していた。もともトルーンカードを張り巡らして使う魔術であり、即席の魔術など本来の十分の一も發揮できていないのにも関わらず。

『目標の移動を確認。ただちに「遅いんだよっ！」

聖人の力で強化された上条の右手がインデックスの頭を掴む。

そして幻想する。

少女に降りかかる全ての悪意を打ち消すことを。

少女の中に巣ぐつ全ての悪意を打ち消すことを。

少女の世界に矛盾なきことを。

「インデックス。飯食いに帰ろつぜ」

上条の声と同時に、インデックスは崩れ落ちた。

終わつたんだ。

上条当麻は安堵した。そして、それはまだ早かったことを知る。

「上条当麻！－ その羽根に触れてはいけない！－！」

降り注ぐ白い羽が、たつた今到達したのだ。

標的の頭へ。

「・・・・あつ」

そして、上条当麻は崩れ落ちた。

## 最終章『全ての終わつ』（後書き）

空丸「「」めんなさい、誤字脱字あると感ります。ほんとう見直しました。次のエピローグでインテックス編は最後です。もう少しなので見捨てずお付き合ってお願いいたします」

## Hプローグ～記憶～（前書き）

前回のおわりインデックス

禁「終わったねー」

上「ああ、終わった」

禁「これが終わったらジャッジメント編なんだよねー」

上「ああ、俺の過去編でオリジナル話だ」

禁「過去編ってことは私出ないんだよねー」

上「ああ、過去編ってことでインデックスは・・・」

禁「ひとつまづかりするいんだよおおおおおおおーーー！」ガブリー！

上「ああ、最後まで不幸だあああああーーー！」

空丸「それではHプローグお楽しみください」

病室。

田の前にはカエルをつぶしたような白衣の男が立っている。

「うーん・・・これは」

カエル先生が苦虫をつぶしたような顔をしている。

「君、自分の名前は言えるかい？」

名前？

俺の名前は・・・、何だっけ？

思い出せない。

思い出せない。

なんだっけなんだっけなんだっけ。

「やはり、記憶喪失なんだね」

記憶喪失？

記憶を失ってるのか俺？

分からぬ分からぬ分からぬ。

「しかも、記憶喪失にレベルをつけるなら、レベル5の記憶喪失だ。脳の回路が焼き切れていて新しく作り直されている。つまり、記憶を思い出せないのではなく、記憶が完全になくなっているんだ」

カエルの先生は悔しそうにしていた。

「どうやら記憶をなくす前の俺と仲が良かつたらしい。

「まつたく・・・幻想体現なんて仰々しい名前をつけていたけど、結局の所幻想にとらわれて現実を失っているじゃないか」

幻想体現？

「ああ、幻想体現。君の能力は頭の中に思い浮かべたことを現実に持ち出せるんだ。例えば一瞬にして移動したいとか、普通なら持てないような重い物を持ち上げたいとか。思い浮かべられることは何だつてできたんだよ」

なんだつて・・・それなら。

「か・・・みじょうとつま？」

俺の言葉を聞いてカエルの先生が絶句している。

「ま、まさか幻想体現で？ ないものをどうやって想像したという

「もしかしてA.I.M拡散力場が関係し——どうまああああああ——！」

カエル先生の言葉を書き消す女の子の叫び。

「……インデックス？」

幻想はあつたはずの記憶を探し出すこと。

どこかにあつた上条当麻の記憶は見つけたが、それは誰から歴史の教科書を見せられてるよつで、他人事のよつで、とても記憶と呼べるものじやなかつた。

「忘れてないんだね？」良かつた良かつたよお「..」

目の前の少女が喜んでいる。

歴史の教科書には、大食いのシスターと書いている。

本来は“歩く教会”と呼ばれる純白の服を着ているみたいだけど、今は病院から支給されたパジャマだ。

・・・え？  
俺は彼女の傷を・・・治せてない？

「インデックス・・・ごめんな」

「なんで謝つてるのかな？」

むしろ感謝の気持ちでいっぱいなんだよ。

インデックスの優しい笑顔に俺は泣きだになつた。

過去の上条当麻が田の前にいたりぶん殴つてやりたい。・・・なんである時もう少し堪えなかつたんだ。

「お前の傷・・・治せなかつた

自分で言葉にしてさうに落ち込む。

この少女は今後誰かを好きになつても傷といひ翁等感に苛まれながら生きていかなければならぬ。

それは神裂という女の子も同様で、一生この少女に謝罪しながら生きてこへりとだらう。

・・・俺のせいだ。

「・・・・・といつま。手を貸すんだよ」

えつ、手?

「あつ、ちゅうつー。上条さんは紳士なのですよー?」

インデックスは俺の右手を掴むと、自分の服の中にべこと引っ張つた。

・・・やばい、記憶を失う前も今も上条さんは女の子のお腹なんか触つたこと・・・あ、あつた。

右手が触れる肌はとても柔らかく、いつまでも触れていたいと思

つてしまつ。

・・・ もういいやましこ意味でなくやましこ意味です申し訳ありません。

「とつま、傷なんてないんだよ」

・・・あ、ほんとだ。

「僕を誰だと思つてるんだね」

一連のやり取りを呆れ顔で見ていたカールの先生が口を開いた。

そうか、この人は『伝説の『冥土返し（ヘヴンキヤンセラ）』なんだ。彼に治せない怪我は・・・ない。

「とつま、泣いてるの？」

泣いてる？

俺が？

記憶を失つたはずの俺が以前の記憶をたどつて？

・・・確かに脳から記憶は消え去つたかもしれない。

でも、俺は田の前の少女のために 泣けるんだ。

「とつま、上条さんもう一つ謝らなきやならなうことがあるんで

すよ

「へ？ ・・ 何かな？」

「裸見ちゃつたてへ 」

ほんとは自分じゃない。“過去の自分”だ。

インデックスが両手で胸の辺りを隠しながら顔を真っ赤にして睨んできた。

さつきは触れさせてくれたくせに。

「ううう、うう。あんなに色々あって、あえてそこをチヨイスしてくるなんて、ううのはやっぱり超絶エッチだつたんだね！！！」

インデックスが飛びかかってくる。

傷だらけの頭を噛まれながら、俺は安心した。

過去の俺が嫌な奴じゃなくて良かつた、と。

窓のない部屋。

「どうやら事なきを得たみたいだ」やー」

「ああ、そのようだな」

「それにして、かみやんはレベル4ぜよ。なんでそんなに執心するのかにゃー？」

「レベル4に判定するように命令したのは私だ」

「じゃあ、本物ぞじれくらいなんだ？」

「・・・ふつ、超電磁砲を簡単にあじりつべベル4がこむと細いつのかね？」

「・・・・・・

イギリス。

「上条・・・・・当麻。私の・・・・

「何独りでぶつぶつ言つてるんだ？ 神裂」

「はわわっ！ す、スタイル！ インチックスの処遇はー？

「ああ、彼女は上条当麻の保護下に置かれたこととなつた。そして、彼はア承認みだ」

「・・・上条当麻とインデックスが一人きり」

「君がどつちの心配をしているのか知らないが、今回の件で僕は上層部に疑問を抱いた」

「結局、記憶を消す必要はなかったのですね」

「ああ、学園都市の医者の説明では、記憶がパンクすることは絶対にないらしい。どうやら、インデックスに余計な感情を持たせないように上層部が仕組んだ魔術のせいみたいだ」

「それならば、もうインデックスが苦しむことはないのですね」

「ああ・・・。上層部も上条当麻という足かせがある限りインデックスを操作することはたやすいと判断しているようだ。あの男の行動心理なんて単純だからね」

「そうですね・・・」

「行きたいのかい？」

「い、いえっ、そんなことはありません！」

「・・・まあいいさ。僕は次の任務があるから行くよ」

「分かりました」

「・・・はあ、上条当麻。私の初めてを奪つた男」

「ひして、学園都市内で起きた魔術事件は学園都市に住む誰にも知られることなく幕を下ろした。

インデックスは俺と一緒に暮らすこととなつた。

彼女もまた俺と出会いまでの記憶を消去されていたらしいのだ。

ステイルは『彼女に何かあつたら地獄に落とすから覚悟しておけ』と言い放つて消えてしまった。

本当は自分が一緒に住みたいだらう。』

「とーま、とーま、今日の、」飯は何かな?』

俺は思つ。

結局幻想を抱くのは誰かと関わりたいといつ心なのだ。

記憶を失つても心までは失わなかつた。

だから、今の俺は過去の俺なんだ。

レベル4 イマジンブレイク  
幻想体現

わたくしこと上条当麻の人生はまだまだ続く。

「ああ、今日はウインナー炒めにウインナーご飯にウインナー味噌汁だよ」

「うう、いい加減ウインナーやソーセージからは離れたいんだよ」

「・・・インテックスさんのHッヂ」

「意味が分からんのだよ！－！－！－！」

「いてつ！－！頭をかじるのは反則だぞ！－！－！ああもう・・・・・

不幸だああああああああ－！－！－！」

「とある普通の能力少年」

ジャッジメントを破壊する少年、上条当麻。

そして・・・

ジャッジメントと関係のない少女。

ジャッジメントを諂ひ男。

ジャッジメントを利用する女。

ジャッジメントの頂点に立つ青年。

ジャッジメントを田指した少女。

それは、とある少女の記憶。

LOST THE IMAGINE BREAKERS

『上條当麻 追憶編』

BREAK OF THE JUDGMENT

## Hペローグ～記憶～（後書き）

こたつの上にインデックス

空丸「…………本当にじめんなさい」ドゲザ

禁書「…………」

神裂「…………」

上条「え、えーっと、状況を説明しますと、このインデックスは裸にされ、神裂は俺に初めてを奪われた罪で作者が土下座させられておつまみ」

禁書「とうまもとうまなんだよっ！」

神裂「そうです！ 実際に上条当麻が行動したのですし、あなたも謝るべきです！」

空丸「そりだーそりだー」ボウヨウ

神・禁「あなたは黙ってー！」

空丸「…………」ドゲザ

禁書「それに私の出番がもうないんだよー！」

神裂「私もないです！ だから最後に文句くらう言わせてください！」

上条「いいつ！ それが理由なら作者に書つてくれよ。」

白井黒子「ひょ、ひょっと！ 今台本を読んできましたら、私がこの類人猿とあんなこといやいふなことになるんですか？」

禁・神・上「…………？」

初春飾利「私の出番もありますー」

固法美偉「あら、私もあるわね」

上条「…………よ、よしあくお願いします」フカブカ

ジャッジメント編組  
『わいわいがやがや』

インテックス編

『・・・・・』クウキポカーン

空丸「…………こんな感じでお廻りします」

空蝉「作者はまだ一ページも書いておりません」

空丸「ばつ…………て、徹夜だああああああーーー！」

「これからも、よろしくお願ひします

## 【風紀委員編 登場人物】

・主人公

【名前】上条当麻

ドリームガムトウル

【能力】妄想実現レベル3

妄想を現実化する力。インデックス編とは違い、現象そのものにも能力を使用できるが、その力は不安定で多くの研究機関が彼を監視している。

【性格】トラブルごとに巻き込まれるだけでなく突っ込んでいき全てを終わらせてしまう究極のおせつかい。本人の意思で敵と認定された側には無慈悲な攻撃を繰り出す。黒子とパートナーにされ最初は嫌がるのだったが・・・。

・準主人公

【名前】白井黒子

テレポート

【能力】空間移動レベル4

【性格】プライドが高いお嬢様。ジャッジメントに入つて一年半ほど経つ。半年ほど初春とパートナーを組んでいたが、固法の命令で上条のパートナーになる。上条に対しなぜか反骨精神を剥きだしにしてしまう。

・登場人物

【名前】初春飾利

【性格】色んなものに憧れを抱く少女。たまに黒春が発動し、そのダークな言動に周囲を困らせることがある。

【名前】固法美偉

【性格】第177支部のリーダー。メガネ巨乳美人として、他の支部からも一目置かれる存在。上条とは知り合いなのだが・・・。

【名前】 紅井焰オリジナル  
くれないほむら

【性格】 レベル4の火炎使い。風紀委員の代表。熱い性格で暴走することもしばしば。基本的には代表に選ばれるほどの正義感とリーダーシップを持っているのだが、強さの優劣にこだわりすぎるせいで周囲に迷惑をかけることがある。

【名前】 坂上心オリジナル  
さかがみじいな

【性格】 レベル3【感情操作】（オペレーターEモーション）の持ち主。自分ではレベル3が限界だと悟り、将来のためにジャッジメントに入る。常に自分の利益を考え、上条を自分の勢力下に置こうとするが・・・。

以下、増えたら更新します。

## プロローグ～白い世界～

季節は冬。

学園都市の冬はあまり雪が降らない。  
科学の力で管理されているからだ。その理由は冬に革靴で道路を  
歩いてみると良い。

右腕の腕章を触りながら、白井黒子は物思いにふけっていた。  
時折ツインテールの先を人差し指でいじる姿はとても中学生だと  
は感じさせない妖艶さを醸していた。

「白井さん、どうしたんですか？」

ジャッジメント  
風紀委員のパートナーである初春飾利<sup>（ひじはるかずり）</sup>がホットourkeーを机に置  
きながら質問した。

真冬だというのに彼女の頭の花達は凜と咲いている。

「…………お子様には理解できません」と

流れるように顔をそむける黒子。

初春は両頬を膨らませて抗議するも、無視された。

「あーあ、上条さんがいてくれたらなあ」

初春の何気ない一言に黒子は過剰に反応した。

「あの方の話はしないで頂けますか！――」

それは怒りだった。

初春が彼の名を口にした怒り。

思い出した彼に対する怒り。

そして、そんな彼に對して強く会いたいと願つてしまつた

自分に對しての怒り。

室内に静寂が訪れる。

現在一人で留守番をしているため、氣まずい空気が換氣されるこ  
とはない。

(・・・・・何か喋らなきや)

黒子の怒りの原因を初春は思い出していた。

元風紀委員、上条当麻。

レベル3にして風紀委員の代表を一瞬にして倒す実力の持ち主。

白井黒子の元パートナーにして、彼女の初恋相手。

そして、"風紀委員を破壊し尽くした男"。

「初春…、電話鳴っていますわよ」

黒子に指摘され、初春は慌てて電話に出た。

「はい初春です。はい、はい・・・え？」

初春の表情の変化に黒子も緊張を張り巡らせる。

事件なら喜ばしいことですわ。不謹慎にも黒子は事件を願っていた。

事件を追っている時は全てを忘れられるからだ。

「・・・白井さん、落ち着いて聞いてください」

相手は能力者の暴走かスキルアウトか、いずれにしても腕が鳴りますわ。

黒子の耳に期待が満ちる。

「・・・御坂さんが病院に運ばれました」

言葉を最後まで待たず、黒子はその場から消えていた。

「付き添つていてるのが上条さんって・・・言つた方が良かったかな

あ

初春は白く曇つた窓に相合傘を書いた。

名前は『当麻×飾利』だった。

黒子が病院へついてみると、待合室が何やら賑やかだった。

「あんたが勘違いするからつー。」

「いやこや、ビニールがお腹抱えてますからー。」

「ちよ、ちよっとアイス食べすぎただけよ・・・って何言わせるのよー。」

「お、お前病院で電撃はやめろーー。」

声のやり取りを聞いて黒子は思つ。

(帰るうかじり・・・)

しかし、一人に存在を気付かれ黒子は作り笑顔で迎える。

「あら、お姉さま」機嫌麗しゅ。病院に運ばれたと聞いた時には黒子驚きのあまり心臓が飛び出しそうでしたわ」

美琴は皿を細めて上条を睨みながら口を開く。

「・・・たぐつ、あんたのせいで後輩にまで迷惑かけたじゃない」

必死に怒りの表情を演技しているが、美琴の口の端がにやけているのを黒子は見逃さない。

それほど、この類人猿と戯れるのがうれしいのか。

「えつと、このツインテールの美人なお嬢様は・・・」

上条は黒子を見て困惑した表情をしてくる。

それもやうだ。黒子と上条は“初対面”なのだ。

「類人猿などに聞く口はござりや」

「あ、白井……黒子？」

上条は数年来会っていない友達の名前を思い出したかのよつて書  
つた。

「あ、え、なんですか？」

黒子は動搖する。

「あれ、私あんたに言つてたっけ？」

美琴は不思議そうに尋ねる。

「いや、俺と黒子は同じジャッジメン

」

上条は言葉の途中で止まつた。

そして、驚愕の表情を浮かべ、それから泣きそうな顔になる。

まるで表情のパレードだ。

黒子も美琴もそう思つた。

「い、いや、なんでもない。はじめましてだな。俺の名前は上条当  
麻です」

下手な演技だ。

美琴はソックリをに入れようとしたが、黒子がすかさず、

「はじめましてです。私は井黒子と申します。お姉さまと将来を誓い合つた仲でござりますの。分かつたら今後一切お姉さまに近寄らないで頂けます」

「黒子、そんなに言わな

」

美琴は途中で言葉をやめる。

黒子の顔が真っ赤だつたからだ。

それは照れているようすで、

それは嬉しそうなようすで、

・・・泣いてくるようすで。

「・・・お姉さま、私はちょっと用事を思い出しましたので、先に失礼いたしますわ」

逃げるようになにその場を後にした黒子。

「・・・黒子」

その後、上条を問い合わせた美琴だったが、答えを得られることなく、

とあるビルの貯水塔の上。

「なんですかー。」

黒子は叫ぶ。

嫌なこと悲しいこと辛いこと。  
負の感情が抑えきれなくなつたら、黒子はいつもの口で叫ぶ。

「上条当麻ーー。」

黒子は叫ぶ。

届いて欲しい想いと届けてはいけない想い。

聞いてほしい願いと叶え続けなければならぬ願い。

「・・・あれば、演技だったというんですの・・・・・」

黒子の声は届かない。

黒子の想いは届かない。

黒子の願いは届かない。

そして黒子は思い出す。

あの日、あの時、あの場所で、

上条当麻に殺され、

上条当麻を殺したこと。

「とある普通の能力少年」

LOST THE IMAGINE BREAKER

『上条当麻 追憶編』

BREAK OF THE JUDGMENT

プロローグ～白い世界～（後書き）

じたつの中で上条黒子

黒「やい、寒いですの」

上「やつやあ、冬だからな」

黒「あなたと二人だなんて反吐がでますわね」

上「……上条さんだつて傷つきます」とよ

黒「……ふんつ、私と主役を張れる」とを光榮に思こなせこ

上「黒子」

黒「な、なんですの」ドキドキ

上「俺はお前と一緒にやれて、幸せだわ」

黒「な、何言つてるんですのー。」ドキドキドキドキ

上「だつて、空間移動とかできるし、ジャッジメントになれるし、楽しいことだらけじゃんー。」

黒「……」

上「え、なに、なんで怒つてるのー。？」

黒 「お姉さまの気持ちが分かりましたわ！」

上「どわっ！ 熱いお茶頭上に空間移動させるなーー！」

空丸エンドレスティーズ

空丸 いよいよ始まりました上条追憶編

空蝉「仕事中もこれの構想ばかり考えております」

空丸一 ちやん、ちやんと仕事もがんばってあるからね！？」

空蝉一それにしても、禁書・ヒラヒラ・ねーちゃんファンには辛い物語になりますのマスター

空丸「ああ、ビリビリはこのシリーズの後に一方通行編で準主役になれるからいいけど、ねーちんにいたつては構想には名前すら現れてないもんな」

神裂  
」

空丸「それというのも、神裂は聖人というだけで特に物語に関わる要素がないから悪いんだ。おっぱい役として出てくる以外に彼女の役割はあろうか、いやない！」

神裂「…………」ピクピク

空蝉「わわわ・・・」——  
ゲロ

空丸「そもそも18歳であんな変態ファッショングだとの先人生どうや・・・つて？」

空蝉「新シリーズをどうかよろしくお願ひいたします」 フカブカ

## お知らせ

予約掲載に変えますので、毎日夜七時ころを楽しみに待っていてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3176ba/>

---

とある普通の能力少年。

2012年1月14日19時56分発行